

め、赤緯 0° — $+20^{\circ}$ の中の40ヶの基本星が撰定され、此等のものの若干と、天頂星との観測が行はれるのである。特に、クロノグラフと無線受信装置の記録に於ける lag が注意を促がされてゐる。最後の結果整理はパリにある Bureau International de l'Heure で行はれる筈。

會議は excursion 其の他多くの社交的な催しも含まれ、大統領の閲見や、Coimbra 及び大學への見學等もあつた。又、佛國の H. Deslandres 氏には名譽學位が大學から贈られた。

次の第6回總會は、1936年に英國エデンバラ市で開かれる筈。

花山の國際經度觀測終る

去1926年の秋に全世界の天文臺で行はれた 第一回國際經度觀測の成績により、1933年には第二回の観測プログラムが作られ、我が日本でも花山と三鷹の兩天文臺が之れに参加した。

花山天文臺は1929年の創立であるから、第一回の國際經度觀測には間に合はなかつた。それで、こんどの1933年の観測が初めてのものであつた。之れがためには、學術振興會から補助金が下附されたので、去る夏以來、花山では、いろいろ準備が進められ、いよいよ去る九月1日から観測は開始された。

観測者は山本臺長、稻葉理學士及び高城武夫氏の三人で、毎夜二人ずつ交代して観測當番となり、更に其の當番二人が、観測者と記録者とを交互に勤めた。

器械は、口径90耗のバムベルグ會社製の子午儀、それに自記測微尺を付け、倍率120倍の接眼鏡を使用した。又、クロノグラフはケンブリヂ式のものをを用ゐた。

標準時計としては本館地下室に裝置されてあるリフラーと、シヨットと、兩種の恒星時振子時計を用ゐ、リフラーの補助時計を無線室に置いて、之れで無線時報を聴取し、シヨットの補助時計は子午儀室に置いて、直接に観測用として、クロノグラフを働かせた。——毎日、午前11時と午後9時とに船橋の無電局の時報を取り、尙ほ、毎朝4時には佛領インド・シナのサイゴン無電局の時報を取つた。其の他、時々、蘭領ジャバのマラバヤ、其の他の無

電局の時報を聴いたけれど、規則的には聴取しなかつた。時計に可なり自信があるので、人の少ない花山では、徒らに多くの時報をむさぼることを敢てしなかつた。

觀測は九月1日から始められ、去る十二月16日早朝に終了した。此の期間の總日數107日。其のうち、晴天に恵まれて、觀測の行はれた日が89日。其れを、觀測者によつて小分けすると、

山本氏が	觀測者として	28日、	記録者として	15日、
稻葉氏	〃	52日、	〃	32日、
高城氏	〃	43日、	〃	39日。

此の期間中、記録者として、臨時に、小山理學士が1回、太田量平氏が15回援助された。

觀測した星數は延べにして總計1157個。其のうち國際的リストの星が約200個ある。

觀測の整理は今後主として稻葉氏が當る筈。

此の觀測プログラムの實行の機會に、花山では地下時計室の恒温裝置が完成し、蓄電池室が新設せられ、屋外の強電流や弱電流の電線工事が新裝され、時計比較用のクロノグラフ其の他の器械が改良せられ、又、子午線館の南北兩側には目標が新設せられた。

天氣は豫想外に良好であつた。九月中、殊に良かつたので、本觀測が九月15日から始まるまでの練習を充分に行ふことが出來た。十月に入つて、時々曇られたが、しかし、一週間も續いた曇りは無かつた。

近いうちに花山の經度が精密に決定されるだらう。

編輯室より 前號の表紙にある説明をすつかり忘れてみました。あれは去年五月13日山本會長がカナダへ出帆された横濱港で船の甲板から會長が見送りの人々を撮影されたものです。又、本號の表紙は山本會長が長田氏と共に去る七月20日にパサデナ市のヘール天文臺を訪問された時の寫眞です。

次の二月は獅子座流星記念號です。